

氏名	KIRA Esra	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第 6006 号	
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	第二言語習得の観点から見た日本語の形容詞的形式 —トルコ語の形容詞的分詞との対照—	
学位論文審査委員	教授 栗林 裕	教授 宮崎 和人
	准教授 片桐 真澄	准教授 堤 良一

## 学位論文内容の要旨

本論文は日本語のタとテイルの形容詞的用法とトルコ語の形容詞的分詞の  $-Ik$  と  $-mIs$  を研究の対象とし、学術雑誌への掲載論文や口頭発表した内容を中心にまとめられ、以下の全五章および付属資料 1 と付属資料 2 から構成される。

第一章 序論

第二章 トルコ語と日本語のテンス形式と分詞／名詞修飾形式

第三章 トルコ語の形容詞的分詞とタ・テイルの形容詞的用法

第四章 質問紙調査によるタ・テイルの使用状況と  $-Ik$  と  $-mIs$  との対応関係

第五章 結論

略号一覧

参考文献

参考教科書

謝辞

付属資料 1

付属資料 2

本論文では、トルコ語の形容詞的分詞の形態的・統語的特徴や連体修飾節を形成する際に見られる制限について概観し、分詞が接続する動詞と被修飾名詞の意味的特徴と分詞の対応関係を明示する。論文の前半は、トルコ語の形容詞的分詞に対応する日本語のタとテイルの形容詞的用法の形態

的・意味的な特徴と動詞を形容詞化する際の成立条件について概観し、両形式の動詞による対応関係と構造的な位置による対応関係について記述する。それらの特徴に基づき、両言語の形式の対照を行い、類似点と相違点を明確にする。論文の後半は、第二言語習得の観点からタとテイルの習得に影響をもたらす要因を探り、言語教育への貢献を目指す。

日本語には、主節と連体修飾節という構造的（統語的）位置による述語形式の交替現象が見られる。具体的には、主節においてテイルで現れる述語が、連体修飾節においてタやテイルで現れるという現象である。形容詞的な意味を持つこのような用法はタとテイルの「形容詞的用法」と呼ばれている。また、連体修飾節における形容詞的なタとテイルは結果の状態を焦点化するか（構造的形状動詞（壊れる、破れる等）、それを焦点化せず動詞自体がほぼ形容詞的用法専用のものであるか（語彙的形狀動詞（優れる、変な形をする等））により区別される。一方、トルコ語では、日本語の形容詞的なタとテイルに対応する形容詞的分詞の **-Ik** と **-miş** の使用は、動詞の自他や語彙的アスペクトや統語構造において動作性を持つかどうかにより区別され、日本語のような制限はない。

- a. Cam kır-ık → Kır-ık / kır-ıl-mış cam  
ガラス 割る-PRT 割る-PRT 割る-PASS-PRT ガラス  
‘ガラスが割れている → 割れている／割れたガラス’
- b. Cam kır-ıl-mış → Kır-ı / kır-ıl-mış cam  
ガラス 割る-PRT 割る-PRT 割る-PASS-PRT ガラス  
‘ガラスが割れている → 割れている／割れたガラス’

また、連体修飾のタは動詞的解釈と形容詞的解釈の二つを持つが、テイルは「単なる状態」や「結果の状態」という形容詞的解釈のみを持つ。この点からはタと **-miş**、テイルと **-Ik** は同様な振る舞いをするといえる。

トルコ語を母語とする日本語学習者が使用する日本語教材の初級段階では、テイルの形容詞的用法は導入されるのに対し、タの形容詞的用法は取り扱われない。両言語間について相違点と類似点の早期段階の導入状況の現状は、トルコ語を母語とする日本語学習者のタとテイルの習得を困難にしていると考えられる。

本論文ではタとテイルの形容詞的用法の習得状況を明らかにするため、トルコの大学の日本語教育学科に在籍する1年生から4年生までのトルコ語母語話者（117名）を対象にアンケート調査を実施し、どのような要因が習得に影響をもたらすかを探った。具体的には、構造的（統語的）位置による使用状況とそれ以外の要因による使用状況を検討する文法テストと、両言語の形式の対応関係を検討する翻訳テストの二つの観点から調査を行った。

文法テストによる調査結果として、語彙的形狀動詞の場合、1年生、2年生と4年生はテイルを使用する者が多く、正答を得られるかどうかは統語的位置による形式の交替と関係があることが明らかになった。構造的形狀動詞の場合も1年生、2年生と3年生では統語的位置の違いがタとテイルの使用に影響を及ぼしているということが明らかになった。

早期段階で学習項目として導入されたテイルが用法の定着化と関わっているかどうかは、学年間で有意に異なっており、1年生と2年生は誤答のテイルを選んだ者が多く、逆に3年生は正答のタ

を選んだ者が多かった。つまり学習期間が長いほど、正答のタを得られる割合が高くなっていることが明らかになった。構造的形状動詞の連体修飾節におけるタの使用の傾向は、結果の状態や対象の状態や属性を表す構造的形状動詞をタの動詞的解釈と結びつけることができることと関わっている。翻訳テストの結果からは、日本語からトルコ語へ訳す場合に述語のタと連体修飾のタを **-mİş** に、テイルを **-Ik** に対応づける傾向が見られた。それらの対応関係は、タと **-mİş** は動詞的解釈と形容詞的解釈の両方を持つという点で共通し、テイルと **-Ik** は状態の意味を持つという点で共通していると考えられる。トルコ語から日本語へ訳す場合は、学習期間が短い場合の **-mİş** は述語でも連体修飾節でもタに対応づけられるものが多く、**-Ik** は両方の統語的位置においてテイルに対応し、日本語からトルコ語へ訳す場合と並行している。しかし、学習期間が長い場合には連体修飾の **-Ik** はタに対応づけられる傾向がある。それはテイルの定着化の影響がないことを示唆し、学習期間が長いほどタの動詞的解釈と共に形容詞的解釈も登場することを示している。

## 学位論文審査結果の要旨

Kira Esra 氏が提出した学位請求論文「第二言語習得の観点から見た日本語の形容詞的形式 — トルコ語の形容詞的分詞との対照 —」に関する学位論文審査会は、2019年2月5日（火）15時より16時15分まで一号館2階2-3セミナー室で行われた。学位論文審査委員会は、栗林裕（主査：言語学）、片桐真澄（言語学）、宮崎和人（日本語学）、堤良一（日本語学、日本語教育）の各教員の合計4名で構成された。

初めに Kira Esra 氏自身が論文全体の要旨を述べた後、予備論文で指摘された問題点に対してどのように対応したのかについて、要点を記したレジュメを用いつつ説明があった。引き続き、個々の審査委員から質問およびコメントが出された。

本論文は日本語の形容詞的形式（タ、テイル等）をトルコ共和国のトルコ語の対応形式（**-mİş**、**-Ik** 等）と対照しつつ、第二言語獲得の観点から分析したものであり、学術雑誌への掲載論文や口頭発表した内容を中心にまとめられ、全5章から構成される（総頁数 A4版165頁）。本論文の研究成果は以下のように、外部からの客観的な審査を経ている：日本のチュルク系言語研究者が集まる研究会（ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会）での口頭発表（1本）、発表前審査有の国内全国大会での口頭発表（関西言語学会）（単独1本、共同1本）、発表前審査有の国際学会発表（日本語・日本語教育研究国際大会）（2本）、日本の査読付き学会誌（KLS）（1本）、トルコの査読付き国際学術雑誌（JDI：日本語研究）（単著1本、共著1本）及びトルコの査読付き国際学術雑誌（英文 単著1本）。

本論文では、日本語の構造的（統語的）位置により変化する形態的な交替現象について、トルコ語の対応形式と比較しつつ理論的な諸問題を検討し、さらに日本語教育の観点からアンケート調査に基づく様々な記述的データを収集することにより分析・検討し、主に二つの観点から次のような研究目的を掲げて論を進めている。

対照言語学からの観点：

- 1) トルコ語と日本語の形容詞的形式の究明
- 2) トルコ語と日本語の形容詞的形式の対照

応用言語学（第二言語獲得）からの観点：

- 3) 形態的・統語的な影響の有無の究明
- 4) 教育の導入手法の影響の有無の究明
- 5) 両言語の形式の対応関係の究明

研究方法としては、トルコの国立大学の教育学部日本語教育学科の協力の下、トルコ語を母語とする日本語学習者（117名）を対象に質問紙調査を実施し、得られたデータに対して統計的分析を行った。得られた結論は概ね以下のように纏めることが出来る。

対照言語学からの観点

- 1) 日本語とトルコ語の形式は全て非対格動詞に接続する特徴を共有しているが、**-Ik**、タとテイルは他動詞にも接続しうるのに対し、**-mİş** のみが他動詞と共起できない。
- 2) トルコ語の形容詞的分詞は達成動詞と共起でき、日本語に見られる典型的な形容詞的動詞とそうでない形容詞的動詞といった分類に基づいては区別されない。
- 3) **-mİş** とタは出来事中心の様態副詞と両立できる点で共通しており、**-Ik** とテイルは様態副詞とは両立できない点で共通している。
- 4) 期間を表す表現との両立についても **-mİş** とタ、**-Ik** とテイルは共通しており、**-mİş** とタは共起できないのに対し、**-Ik** とテイルは共起できる。
- 5) 日本語では語彙的形狀動詞の場合、主節においてテイルのみが使われ、連体修飾化するとタのみが使われるが、構造的形狀動詞の場合は、主節のテイルは連体修飾節においてタにもテイルにもなる。一方、トルコ語は **Ik** と **-mİş** は主節においても連体修飾節においても自由に使われる。
- 6) トルコ語と日本語の形容詞的な形式は全て、結果の状態の意味を共有している。
- 7) **-Ik**、タとテイルは単なる状態を表す特徴を持っているが、**-mİş** のみがその意味を持たない。
- 8) 後戻りの可能性については、形容詞的形式の意味や性質によって左右されるわけではなく、動詞や形容詞的形式、名詞の意味とも深く関連している。
- 9) 形容詞的な形式には、動詞的解釈を持っている場合もあり、**-mİş** とタによる分詞がそれに該当する。

応用言語学（第二言語獲得）からの観点

- 10) 語彙的形狀動詞の場合、構造的な位置による形式の交替と関係があり、学習者の正答は構造

的位置によって有意に異なっていた。母語に存在しない構造的位置による形式の交替が形容詞的用法のタとテイルの使用に影響をもたらしていると考えられる。

- 11) 学習者のタとテイルの使用に形式の類推の影響がなく、テイルを使用する傾向、或はタの回避があることを表している。構造的位置の違いの影響は学習期間の長さに関係があるとは考えにくい。
- 12) 学習期間が長いほど、正答のタを得られる割合が高くなっており、学習者のテイルを使用する傾向がテイルの用法の定着化と関わっていないことが分かった。
- 13) 一時的（後戻りできる）状態や恒常的（後戻りできない）状態というタが付いた動詞と名詞が表す意味により、学習者がタの動詞的解釈（過去・完了の用法）を優先的に取り扱っていることと関わっている。
- 14) 構造的位置の違いはタとテイルの使用に影響を及ぼしていると考えられる。
- 15) 学習者の母語の影響が動詞をタの動詞的解釈と結びつけることができることと関わっていると考えられる。
- 16) 翻訳テストの結果から、学年数を問わず、日本語からトルコ語への翻訳の場合とトルコ語から日本語への翻訳の場合のいずれでも形容詞的形式の選択は構造的環境によって有意に異なっている。
- 17) 学習期間が短い場合には **-mİş** は述語においても連体修飾節においてもタに対応づけられているものが多く、**-İk** は両方の構造的位置においてテイルに対応している。しかし、学習期間が長い場合には 連体修飾の **-İk** はタに対応づけられる傾向がある。つまり、学習期間が長いほど、タの動詞的解釈と共に、形容詞的解釈も現れることを示している。

本研究の特色はトルコ語チャナッカレ方言母語話者である **Kıra Esra** 氏が、日本語学やトルコ語の理論的研究からの研究成果をもとに両言語の形容詞的形式を詳細に分析し、それを基に日本語をトルコ語と比較しながら分析した対照分析としての初めての試みである。さらに第二言語獲得の観点から分析し、トルコにおける日本語教育への新たな提言を行った。本研究の結論と方法論は、他のトルコ語の文法形式と日本語の対応形式とのさらなる対照にも応用することができる可能性があり、将来的にはトルコにおける日本語教育をさらに深化させる形で貢献することが出来る。

審査委員から出された意見としては主に次のようなものであった。全員が共通する見解として、予備論文で指摘された問題点を踏まえた修正がなされていること、さらに個別の意見として、対照する際により体系的な形式に基づいた比較がなされるべきであること、日本語学のアスペクト研究のより新しい成果を取り入れるべきこと、本論中で使われている文法的概念のわかりやすい説明が必要であること、歴史的な観点や文法化との関わりを論じることでさらに研究の深化につながることなどが指摘された。

審査委員会は、**Kıra Esra** 氏の学位請求論文には若干の課題はあるものの、その研究成果の意義を認め、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容であることを全員一致での結論とした。